



Title	『順徳院御集』の諸本研究
Author(s)	鬼束, 彰
Citation	国語国文研究, 123, 55-69
Issue Date	2003-01-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93717
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_123_55-69.pdf



『順徳院御集』の諸本研究

鬼 束 彰

一

順徳天皇の御集『紫禁和歌草』は、一般には『順徳院御集』と言われ、国文学研究資料館のデータベースでも『順徳院御集』のもとにまとめられている。そこで、本稿では論題はそれに従ったが、以下は『紫禁和歌草』の称を用いることとする。

『紫禁和歌草』は、建暦元年三月から承久二年八月までの歌合、歌会等での天皇の歌を年月順に収録している自撰歌集である。和歌総数は諸本により出入りはあるが、最大一二七九首。鎌倉時代初期成立の歌集であり、父後鳥羽院と歌道の師藤原定家により合点が施されている（諸本によつては合点のないものもある）。

いくつかの先行研究の内、唐沢正実氏（一九八五）、大取一馬氏（一九八八）では各諸本を三類に分類することができるという結論にそれぞれ至っておられる。そして、唐沢氏は、諸本一七本を調査され、

1 伝本については、調査した諸本は、基本的には同一系統本であるが、本文内容、歌数、奥書等により三類に分類できると。

2 三類中では一類本が比較的良質な本文を有すると思われるが、使用に際しては桂宮本を底本とした校本等によることが望ましいこと。

3 諸本間の異同の他、歌合、内裏名所百首と、御集との間に異同が認められ、中に改作の可能性が高い場合を含むこと。

4 合点については、御集編纂の資料となった個々の歌稿に付けられていたと推定し、加點者としては「明月記」の記事などから後鳥羽院・定家が具体的に想定できること。

と、結論づけられている。また、大取氏は伝本について「唐沢氏の論文を参照されたい」と断りを入れ、その上で

詞書・歌本文の異同を基準にして分類した上で、さらに歌数・奥書・合点などから分類すると次の三類に分かれる。

一類本（歌数一二七九首を完備し、合点を有するもの）

二類本（三一―三一九番歌を共に欠脱し、無合点、もしくはもと無合点の可能性の高いもの）

三類本（応永二年実名の奥書を有し、「百首和歌」へ順徳院御百首^{〔注2〕}を附載したものである）

という分類をされている。

本稿では、『紫禁和歌草』の諸本の本文を比較することにより、三分類の正否と各諸本の系統関係、近似関係を明らかにしていきたいと思う。

今回参考とする諸本は、次に挙げる諸本である。なお、書写年代は『私家集傳本書目』^{〔注3〕}（和歌史研究会編 一九六五年一〇月 明治書院）によった。

（一）類本

（高）高松宮蔵本（歌二・二二五）略称としては（高）を用いる（以下同じ）。一冊 一二七九首 奥書なし 合点あり 二四〇番歌と二四一番歌が逆になっている。以下歌番号は『新編国歌大観』の歌番号を用いた。

『私家集大成 中世II』（和歌史研究会 一九七五年一月 明治書院）所収による。また、同書解題によれば（高）本は、二七・三 cm × 二〇・〇 cm。菊唐草模様のある銀茶色の表紙に左に寄せて「紫禁和調草」と記した朱鷺色の題箋がある。書写年時は近世中期か。本文料紙は楮紙。墨付は一一三丁、遊紙は前一丁、後にはない。本文は、第一葉の最初に「紫

禁和歌草」とあり、直ちに歌を書く。以下、一面一〇行書き、五首ないし一〇首一首一行にしるし、第一一三葉末尾まで、総歌数一二七九首（内、他人歌三首）を書写している。ただし、第二十六葉は表裏とも一行書きである。難読箇所傍書したり補記を加えた所もある。難読箇所という形態の写本であることがわかる。

（桂）

宮内庁書陵部蔵本（五一・一〇）桂宮本 智仁親王筆 外題「順徳院御集」内題「紫禁和歌草」一冊

一二七九首 奥書なし 合点あり

一面十二行 和歌一首一行書き 歌題・詞書きおよそ二字下がり

国文学研究資料館マイクロフィルム番号 二〇一二五三一による。

（2）

宮内庁書陵部蔵本（五〇一・六四二）江戸中期写 御所本 外題「順徳院御集」内題「紫禁和歌草」一冊

一二七九首 奥書なし 合点あり

一面十行 和歌一首一行書き 歌題・詞書き二字下がり 国文学研究資料館マイクロフィルム番号 二〇一二〇二一四による。

（6）

宮内庁書陵部蔵本（五〇六・六五）江戸初期写 御所本 外題扉題「順徳院御集」内題「紫禁和歌草」一冊

一二七九首 奥書なし 合点あり

一面十行 和歌一首一行書き 歌題・詞書き一字下がり

国文学研究資料館マイクロフィルム番号 二〇―二二―四
による。

唐沢氏によると、「扉題は後西天皇筆。外題は中御門天皇筆」とある。

(二類本)

(3) 宮内庁書陵部蔵本(五〇一・六四三) 江戸中期写 御所本

外題「順徳院御集」内題「紫禁和歌草」一冊

一二七六首 奥書なし 合点あり(一二三)三五三番歌の合点
はイ文書き入れ(三二)一番〳三一九番欠落。貼り紙により補充。

一面十二行 和歌一首一行書き 歌題二字下がり 詞書き三
字下がり

国文学研究資料館マイクロフィルム番号 二〇―二〇―二五
による。

*イ文書き入れが非常に多く、その内容から(五〇六・六五)本
を校合本に使用した可能性も考えられる。

(三類本)

(内) 内閣文庫蔵本(二〇一・三五五) 江戸初期写

外題内題「紫禁和詞草」一冊

一二七九首 奥書あり 合点あり 附「順徳院御百首」
一面十行 和歌一首一行書き 歌題・詞書き三字下がり

国文学研究資料館マイクロフィルム番号 一九―一二四―六
―による。

*『新編国歌大観』はこの本を底本とし彰考館本・三手文庫本を
もって校合している。

彰考館本は二類本に属する本である。

(群)

『統群書類従 第十五輯下 和歌部』巻第四二四所収本「順徳
院御集一名紫禁和歌草」

一二七九首 奥書あり 合点なし 附「順徳院御百首」
(塙保己一編 統群書類従完成会 一九二四年二月)

(桑)

桑名市立文化美術館蔵本(二四)

外題内題「紫禁和哥草」一冊

一二六三首 奥書あり 合点なし 附「順徳院御百首」

一面十二行 和歌一首一行書き 歌題・詞書き二字下がり
一〳三九二番歌・三九三〳八八六番歌・八八七〳一二七九番歌
で改訂されている

国文学研究資料館マイクロフィルム番号 七〇―三五―三に
よる。

(三)

賀茂別雷神社三手文庫蔵本 泉亭文庫(歌/以)

外題「順徳院御集 紫禁和哥草」内題「紫禁和歌草」一冊

一二七七首 奥書あり 合点なし 附「順徳院御百首」
一面十行 和歌一首一行書き 歌題・詞書き二字下がり

三類本に見られる奥書とは、

此御集以一品式部卿御本令校合畢

干時應永貳曆初冬日

從二位大納言

實名判

である。この奥書に関しては、一品式部卿については和田氏（一九三三）が「邦良親王の王子邦世親王」であると考え、實名については唐沢氏（一九八五）が「問題は残るが、小倉実名の書写事跡を伝える。」としている。これらの点については今後検討していきたい。今回調査した諸本は以上の通りであるが、この他に板本である（今本と、形式が明らかに他の諸本と異なり、尚かつ不完全である（弘）本も調査したが、これらの本は異文の箇所より（内）本と近い関係にあるということが判別できた。よってこの二本については深く言及することを避け、他の九本を通して諸本の関係を考察していくことにした。

また、底本とした（高）本と（群）本は翻刻されたものを用い、他の諸本は国文学研究資料館蔵マイクロフィルムの紙焼き写真を用いた。合点については、合点が各諸本に存在するか否かだけを見ることとした。この点に関しては、今後調査したい。

二

まず初めに本稿では、各諸本に見られる異同の状態を共通異文と独自異文に分け、各諸本の相互の関係を考察し、諸本の優劣を判断することにより諸本の系統関係を見ていくことにする。^{（注5）} 各諸本の本文の異同の分布状況は左記の表の通りである。この表で左第1欄は、右の第3欄以降に示した異文対立が何例あるか示す。第2欄の「分類」では、0は独自異文、1は双立共通異文、2は鼎立異文、9は諸本のいずれかが欠落して九本総てを比較できないものを示す。第3欄以降で、（高）本と同じものを0で、異なるものを1で示した。（ただし、（高）本の独自異文は（高）本を1で、他本を0で示した。）では、例数の多い共通異文の例から先に見ていく。まず、異文の対立が五本対四本となる（桂・高・6・2・3）対（群・内・3・桑）の組み合わせの異文は四五例ある。その例は次の通りである。それぞれの本文の対立について一応の判断ができるものには矢印で、優位↓劣位のように示し、特に（歌）の場合、次行に一首全体を桂宮本で示した。

0018（歌）秋の夕きり	↓	（群・内・3・桑）
春霞かすみし山のふもとにも		秋の夕暮
0065（歌）なかめの末よ	↑	なかめの末に
み渡せはまのゝ萩はら露白し		なかめのすゑよ月や出ぬる

表 『紫禁和歌草』 諸本の異文対立

例数	分類	高	6	2	桂	3	群	内	三	桑
58	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
13	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
38	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
20	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
103	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
16	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
76	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
23	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
22	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
47	1	0	0	0	0	0	0	1	1	1
45	1	0	0	0	0	0	1	1	1	1
22	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1
12	1	0	0	0	1	1	1	1	1	1
5	1	0	0	0	0	0	0	1	1	0
4	1	0	0	0	1	0	1	1	1	1
4	1	0	0	0	0	0	1	0	1	1
3	1	0	0	0	0	1	0	1	1	1
3	1	0	0	0	0	1	0	1	1	0
2	1	0	0	0	0	0	1	1	1	0
2	1	0	0	1	0	0	1	1	1	1
2	1	0	0	0	1	1	0	0	0	0
2	1	0	1	1	1	1	1	1	1	0
2	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0
2	1	0	1	0	0	0	0	1	1	1
2	1	0	1	0	0	0	1	1	1	1
2	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1
2	1	0	0	0	0	0	1	0	0	1
1	1	0	0	1	1	1	1	1	1	1
1	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0
1	1	0	0	0	1	0	1	0	0	0
1	1	0	1	1	1	1	1	1	0	0
1	1	0	1	1	1	1	1	0	0	0
1	1	0	0	0	1	1	0	1	1	1
1	1	0	0	1	0	1	1	1	1	1
1	1	0	1	1	0	1	0	0	0	0
1	1	0	1	1	0	0	0	1	1	1
1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0
1	1	0	0	0	0	1	1	1	1	1
1	1	0	0	0	0	0	1	0	1	1
1	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0
2	2	0	0	0	0	2	0	1	1	1
1	2	0	0	0	0	0	0	1	1	2
1	2	0	1	2	0	0	0	0	0	0
1	2	0	0	0	0	0	1	2	3	2
1	2	0	1	1	1	2	1	1	1	1
1	2	0	0	0	0	2	0	0	1	1
1	2	0	1	1	2	1	2	1	1	3
1	2	0	0	0	0	0	1	1	1	2
1	2	0	0	0	0	0	1	2	1	1
1	2	0	1	1	1	2	3	1	1	1
1	2	0	0	0	0	0	1	1	2	2
2	9	0	0	0	1	9	1	1	1	1
2	9	0	0	0	0	9	1	1	1	1
1	9	0	1	1	1	1	1	1	9	9
1	9	0	0	2	1	0	1	1	1	9
1	9	0	0	0	0	0	0	0	1	9
1	9	0	0	1	0	0	0	0	0	9
1	9	0	0	0	0	9	0	1	1	1
1	9	0	1	1	1	1	1	1	1	9
1	9	0	0	0	0	0	0	1	9	9

0 0 9 9 (歌) 過ぬなり ↓ 過ぬめり
 時鳥雲をたよりに過ぬなり 松のあらしに声をまかせて
 0 1 0 6 (歌) うらめしのよや うらめしの身や
 0 1 3 8 (歌) 神よ事とふ 神に事とふ
 0 1 5 6 (歌) おしむとすれは おしむとすれと
 0 1 8 1 (詞) 寄川恋 歌題ナシ
 0 2 2 0 (歌) あすよりさきの ↓ あすよりさきに
 いる月のなこりに出よほとゝきす あすよりさきの忘れかたみに
 0 2 3 6 (歌) うつりやすきは ↓ 帰りやすきは
 いもせ山たかことののはの秋に又 うつりやすきは心なりけり
 0 2 5 2 (歌) 涙しもまよふ 涙もまよふ(*)
 0 3 3 3 (歌) たゆむもしらぬ たゆむとしらぬ
 0 3 4 6 (歌) 夏のよも 夏の夜の
 0 3 6 5 (詞) 夕嵐 ↑ 夕山風
 0 3 7 7 (詞) 同八月十五夜 同八月十五日
 0 3 9 6 (歌) しのはれそする しのかれそする

0405 (歌)	たつたの山にも	たつたの山も
0407 (詞)	於大夫歌也	權大夫歌也
0475 (歌)	嵐につけて	嵐につれて
0518 (歌)	ゆふかけてをや	ゆふかけてとや
0572 (歌)	いかなる色の	いかなる色や
0601 (歌)	にこらぬかけに	わたらぬかけに
0686 (歌)	色はのこらす ↓	色はかはらす
時雨のみもる山かけのしたはかは	物おもふ袖も色はのこらす	
0702 (歌)	たつの市に	たつ市に
0715 (歌)	あまねかるらし	あまねかるらん
0718 (詞)	以朝	次歟以朝
0727 (歌)	浪のをとかは	浪のをと哉
0745 (歌)	夏の三日月	夏の夜の月
0764 (歌)	田のおもの	田の面は
0806 (歌)	香さへしほるゝ	香さへこほるゝ
0813 (歌)	花もしほるゝ	花もこほるゝ
0815 (歌)	こきまする ↓	こきまつる
こきまする柳さくらのからにしき	都の物となにならひけん	
0885 (歌)	浪はかくらん ↑	浪はかゝらん
うしとても身をはいつくにおくの海の	うのゐる岩も浪はかくらん	
0901 (歌)	うちもすまめぬ ↓	うちもすさめぬ
秋風も夕やさむくなりぬらむ	うちもすさめぬあきのさ衣	
1017 (歌)	むれゐる鳥も ↓	むれゐる鳥の

難波かたむれゐる鳥をとつれて	あられにさはく夕浪の声
1041 (歌) 人のこゝろの ↓	人の心も
冬草のかれにし色はかひもなし	人のこゝろの長さよの霜
1068 (歌) 秋の露哉	秋の夕露
1088 (歌) まかきの秋の	まかきの菊の
1092 (歌) くるはなみたに	ふるはなみたに
1110 (歌) 浪かへる	浪かくる
(歌) あからさまなる ↓	あらぬさまなる
浪かへるきしの桜の花さかり	あからさまなるうくひすのこゑ
1130 (歌) ちる桜哉	桜散哉
1205 (歌) にほひあれ	にほひあれと
1272 (歌) うつしても	うつしもて
1276 (歌) ひとりある人の	ひかりある人の
1278 (歌) くもらさらなん	くもらさりけり

五本と四本との共通異文を以上のように考察すると、どちらかと言えば、五本の本文の方が比較的優位な本文を多く有しているように見られるが、四本の方が優位と見られるものも多少はあり、断定はできない。

次に、(桂・高・6・2・3・群)の六本対(内・三・桑)の三本が対立する共通異文は次の四七例である。

(桂・高・6・2・3・群) (内・三・桑)

0085 (歌) 春の山のは ↓ 春の山かせ
 松の戸になれぬあらしを先たてゝ 花よりあくる春の山のは
 0181 (歌) うきなとゝむな
 0137 (詞) 同比合詩当座 ↓ 同比合詩合当座
 0194 (歌) かすみ吹まく ↓ かすか吹まて
 みよしのゝ霞吹まく山風に 故郷とをきあり明の月
 0199 (詞) 深夜春雨 ↓ 深夜春
 0218 (歌) 旅人の ↓ たれ人の
 たひ人の袂を霧にしほりして 月にそこゆるさやの中山
 0252 (歌) 涙しもまよふ 涙も思ふ(＊)
 0306 (詞) 当座 ↓ 当
 0325 (歌) この比は ↓ この花は
 この比はちりかひくもるかけもあらし 花のかゝみの山川の水
 0328 (詞) 自高陽院殿 ↓ 高陽院殿
 0378 (歌) またひとへなる ↓ またひとへ
 よや寒き衣手うすしかたしきの またひとへなる秋のおもひも
 0379 (歌) 床とはに 床とはゝ
 0390 (歌) 風はむかしの 風もむかしの
 0412 (歌) おなしおのへに おなしおのへも
 0416 (歌) むら雨の空 ↓ しぐれの空
 つれゝのなかめも今やまささちるみ山のあきのむら雨の空
 0453 (歌) しつはたおひの したはた帯の
 0487 (歌) 月にそみかく 月にそ契る
 0513 (歌) 野への萩原 野への萩かえ

0519 (歌) 岡への ↓ をのかのへ
 岳のへのかやは下葉の秋の露 風よりさきの乱なりけり
 0632 (歌) 春の日に ↓ 春の日は
 大よとのうらちのとけき春の日に 霞そ残る松のむらたち
 0633 (歌) ぬれつゝも ぬれつゝそ
 0668 (歌) むらくに むらくと
 0688 (歌) うすこほり うち水
 0692 (歌) いかにたのまん いかてたのまん
 0702 (歌) たまひめや たまひめの
 0717 (歌) 光そひける 玉はそひける
 0739 (歌) 卯花月よ 卯花月に
 0740 (歌) 池水の ↓ 池水に
 0793 (歌) おくもあらはに おくもあらはす
 0804 (歌) 空より消る ↓ 空より明る
 風吹は岑のときは木露おちて 空よりきゆる春のあは雪
 0825 (歌) 雲のはたて(＊の) 雲あはたての
 0884 (歌) いさやまた いまやまた
 0898 (歌) ならのみやまの ならの都の
 0966 (歌) ふる郷は ふる郷を
 0989 (歌) 野へのしら露 ↓ 野への秋風
 百草の花吹しほるあき風に その色となき野への白露
 1005 (詞) 詠歌出之当座 ↓ 詠歌出て当座
 1007 (歌) 色まさりける ↓ 秋まさりける
 なかめつゝ月のかつらのもみちはゝ 時雨せぬよ色まさりける

1047 (詞) 自路頭雪下

月路頭雪下

1060 (歌) すゑ野のすゝき

すゑのすゝきの

1065 (歌) 旅まくら

旅衣

1100 (歌) よしさらは

よしあらは

1148 (歌) 瀬をはやみ

瀬もはやみ

1168 (歌) 木葉ふりしく

木葉ふきしく

いにしへのみゆきもしるしあらし山 木はふりしく跡をみるにも

1213 (歌) あやめもしらぬ

あやめしらぬ

1250 (歌) よもの仏の

よもの仏も

1252 (歌) かすそみえぬる

霞みえぬる

うすくこくかゝれる岑の雲の色に かさなる山のかすそみえける

以上の共通異文を考察すると、ここでは六本側の本文の方が優位であると考えられるものが多いと判断できる。

さらに、(桂・高・6・2・3・群・内)の七本対(三・桑)の二本が対立する共通異文は次の二二例である。

(桂・高・6・2・3・群・内)

(三・桑)

0182 (詞) 長高様

歌題ナシ

0190 (歌) 春の月かけ

松の月かけ

0257 (歌) 秋の山かせ

秋の上かせ

0285 (歌) ちらぬかけをも

いらぬかけをも

0328 (詞) 以御隨身

御隨身

0412 (詞) 霧中雁

霧

0421 (詞) 彼平詠

行平詠

0444 (詞) 旅泊

旅

0447 (歌) 姿(*跡や) みゆらん

跡やみるらん

0501 (歌) こきかへれ

こきかへす

0524 (歌) うらすむ風そ

うらすむ風は

0641 (歌) 歌アリ

歌ナシ

大江山しけみかしたにやとりても 人にしらるゝほたるなりけり

0656 (歌) 人すまは

人すまん

0751 (歌) 霜かれて

雪かれて

山風になひく浅茅は霜かれて 色ことなる岑のもみちは

0788 (歌) むとせの春は

むとせの松は

0875 (歌) さてもまたれし

さてまたれし

0906 (歌) 秋風そふく

秋風はふく

1048 (歌) かゝる白ゆふ

かくる白ゆふ

1103 (歌) おもへかし

思へし

1137 (歌) かよふはしたの

かよふはしたふ

1163 (歌) あすさへふらは

あすさへふらん

1265 (歌) 十年の秋は

千年の秋は

かそふれは十とせの秋はなれにけり さやかに照せ雲の上の月

以上の共通異文を考察すると、ここでは七本側の本文の方が優位本文であると考えられる。

最後に、共通異文数として四番目に多い(桂・3・群・内・三・桑)の六本対(高・6・2)の三本の対立一二例を挙げると次のようになる。

(桂・3・群・内・三・桑)	(高・6・2)
0004 (歌) また春なれぬ	またきてなれぬ
0199 (歌) 軒にはれぬ	↑ 軒はもはれぬ
月影は猶あり明の雲ながら	軒にはれぬ春のむら雨
0241 (歌) 浦人も	↑ うら人の
うら人もしはたれて行袖のうへに	いたくなぬれそ波の月影
0351 (歌) 沖つ風	↓ 沖の風
沖つ風浪も高しのうらちとり	松の末はにやちよとぞ鳴
0352 (歌) うはけやさむき	うははやさむき
0552 (歌) さをしかの	↓ しかの
鳴声はしほれさりけりさをしかの	臥や草かの山の雪に
0632 (詞) 大淀浦	↓ 大淀
1055 (歌) 消るしら雲	↓ 消るしら雪
1068 (詞) 庭上露	↓ 庭上路
1075 (歌) 染る紅葉ゝ	↓ 消る紅葉は
立田山朝をく霜のけぬかうへに	時雨をそへて染る紅葉ゝ
1121 (歌) かひもあらし	↑ かひもなし
山吹の花のしからみかひもあらし	とまらぬ春の井手の里人
1190 (歌) かそえしる	↑ かとへしる
かそへしる人なき山のやま人も	月によひや思いつらん

以上の共通異文を考察すると、ここではいずれの場合にも優位の本文が認められるので、どちらが優位であるかは断定できない。

以上、共通異文の本文対立をまとめると次のようになる。

(桂・高・6・6・2・3)	↑↓	(群・内・三・桑)	四五例
(桂・高・6・6・2・3・群)	↓	(内・三・桑)	四七例
(桂・高・6・6・2・3・群・内)	↓	(三・桑)	二二例
(桂・3・群・内・三・桑)	↑↓	(高・6・2)	一二例

今、右のような状態であるこの九本を、(桂・3)(高・6・2)(群・内)(三・桑)の五グループに分け、右の対立関係を改めて示せば、

(桂・3)	(高・6・2)	↑↓	(群・内)	(三・桑)
(桂・3)	(高・6・2)	↓	(内)	(三・桑)
(桂・3)	(高・6・2)	↓	(三・桑)	
(桂・3)	(群・内)	↑↓	(高・6・2)	

となり、これらを整理すると、

(高・6・2)	↑↓	(桂・3)	↑↓	(群)	↓	(内)	↓	(三・桑)
---------	----	-------	----	-----	---	-----	---	-------

と表せる。これにより祖本との接点の位置は狭く限定することはできないが、(高・6・2)(桂・3)(群)の範囲を超えないであろうことは推定される。

三

次に各諸本の独自異文について見ていきたい。なお、独自異文については例数が多いので優劣の判断が示せるもののみ異同を例示することとする。

まず、(6)本から取り上げることにする。独自異文一三例のうち、優劣を判断しうるものは次の三例である。

0 6 9 0	(歌)	袖とかはしる	↓	(6)	袖かはしる
0 7 6 3	(歌)	窓うつ雨と	↓		窓うつと雨と
1 0 2 8	(歌)	たらいの水	↓		たたらいの水

(桂) 本の独自異文二〇例のうち、優劣を判断しうるものは次の二例である。

0 5 6 0	(歌)	春のよの月	↓	(桂)	山のはの月
0 8 6 6	(歌)	月のかゝみの	↑		月のかつらの

(高) 本の独自異文五八例のうち、優劣を判断しうるものは次の一二例である。

0 0 2 9	(歌)	霜こそむすへ	↓	(他)	霜こそむすへ
0 0 7 2	(歌)	ふかきは秋の	↓	(高)	雪こそむすへ
					ふかきは萩の

0 2 4 4	(歌)	秋とみかさの	↓		秋と見たかの
0 2 5 9	(詞)	契忍恋	↓		契忍恋
0 3 5 1	(歌)	浪もたかしの	↓		浪もたからの
0 3 5 5	(歌)	むすほゝれつゝ	↓		むすほれつゝ
0 4 6 8	(歌)	うつもれわたる	↓		うつもれわわる
0 6 4 2	(詞)	難波江	↓		難波山
1 0 1 3	(歌)	たかしの浜の	↓		たからの浜の
1 0 2 7	(歌)	露をもつゆと	↓		をもつゆと
1 2 1 9	(詞)	螢	↓		螢
1 2 7 8	(歌)	星の光は	↓		ほらの光は

(2) 本の独自異文三八例のうち、優劣を判断しうるものは次の七例である。

0 2 2 7	(歌)	霧ふかき	↓	(他)	霧ふか
0 4 6 2	(歌)	去年のしら雪	↓		去年の白雲
0 5 7 2	(歌)	萩のつゆ	↓		秋の露
0 7 4 4	(歌)	ふく風に	↓		ふ風に
0 8 2 6	(歌)	のは衣	↓		蝉のは羽
0 8 5 7	(歌)	うつりためけん	↓		うつりため
1 2 5 1	(歌)	世の風にこそ	↓		世にこそ

(3) 本の独自異文一〇三例のうち、優劣の判断しうるものは次の一一例である。

(他)

(3)

0 0 1 2	(歌)	夕暮に	↓	夕雪に
0 0 2 8	(歌)	ゆふくれの空	↓	夕雪の空
0 1 2 0	(歌)	色なから	↓	色あから
0 2 3 0	(詞)	蔵部山	↓	蔵郭公
0 2 4 8	(詞)	同比当座	↓	月比当座
0 7 5 9	(歌)	ぬれぬとうかふ	↓	ぬれぬうかふ
0 8 3 8	(歌)	松むしのこゑ	↓	むむしのこゑ
0 9 3 3	(歌)	のとかにそふく	↓	のとかにそふる
1 0 1 5	(詞)	寄竹恋	↓	寄岸恋
1 0 9 2	(詞)	同九月尽	↓	同九月昼
1 2 7 7	(歌)	やとかる月の	↓	やとる月の

(内) 本の独自異文七六例のうち、優劣を判断しうるものは次の一七例である。

(他)

(内)

0 0 4 8	(歌)	むなしき夢	↓	むなし夢
0 0 5 1	(歌)	岩まの水の	↓	岩ままの水の
0 0 5 2	(歌)	春の山風	↓	春の風
0 0 7 1	(詞)	野外秋望	↓	野外望
0 0 8 4	(詞)	同比当座	↓	同比当
0 0 9 9	(詞)	松間時鳥	↓	歌題ナシ
0 1 4 5	(歌)	露にいかなる	↓	露にinar
0 2 8 1	(歌)	行末もかな	↓	行末かな

(三) 本の独自異文二三例のうち、優劣を判断しうるものは次の八例である。

0 2 8 7	(歌)	ゆふつけ鳥の	↓	ゆふけ鳥の
0 3 6 9	(歌)	岩田のをに	↓	岩田のに
0 3 8 8	(歌)	秋の夜の月	↓	秋の秋の月
0 5 4 9	(詞)	夏野風	↓	夏野
0 6 6 4	(詞)	阿武隈川	↓	阿武隈
0 7 0 4	(歌)	たちぬはぬ	↓	たちぬぬぬ
0 9 0 6	(詞)	古寺月	↓	古寺
1 0 2 4	(詞)	水郷冬 当座	↓	ナシ
1 2 2 8	(歌)	秋もうつろふ	↓	うつろふ

(他)

(三)

(群) 本の独自異文一六例のうち、優劣を判断しうるものは次の六例である。

0 0 9 3	(詞)	田家月	↓	田家
0 1 1 9	(歌)	山のはに	↓	山風の端に
0 1 3 4	(詞)	夏暁	↓	夏
0 4 6 1	(詞)	羈中驚	↓	羈
0 6 1 2	(詞)	たえてうらむる	↓	恨る
0 7 4 1	(歌)	郭公	↓	時雨
0 9 1 3	(歌)	山のはの月	↓	山の端の
1 1 9 0	(詞)	見月	↓	見

(他)

0 0 6 5 (歌) まのゝ萩原

0 3 4 1 (詞) 四季鳥歌

0 5 3 0 (歌) 雪のうちに

0 8 7 7 (歌) 暮行そらはなをそかなしき

あしの山引より

0 8 9 8 (歌)

ならのみやまの夜はの月みぬ面かけも

三の色

0 9 2 3 (歌) 枯しより

れかしより

(群)

まの萩原

四季鳥

雲のうちに

(桑) 本の独自異文二二例のうち、優劣を判断しうるものは次の八例である。

(他)

0 0 3 0 (歌) 歌アリ

0 1 1 0 (歌) 浪のうへの月

0 3 6 6 (歌) 残る月影

0 5 1 1 (歌) 歌アリ

0 5 1 2 (詞) 歌題アリ

0 5 4 3 (歌) 歌アリ

1 0 2 3 (歌) たけくまの

1 2 2 6 (歌) 歌アリ

(桑)

歌ナシ

海上月

残る月影

歌ナシ

歌題ナシ

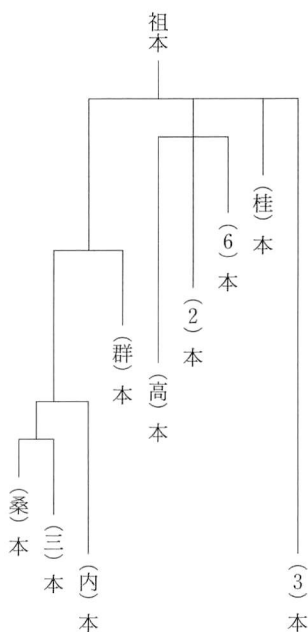
歌ナシ

しけくまの

歌ナシ

以上のように独自異文を考察した結果、(桂)本を別にすれば独自異文の方が優位であると判断できるものは無く、これらの本の中のいずれか一本を祖本に近いと位置づけることはできない。(桂)本については独自異文が必ずしも劣位であるとは断定できないので祖本に近い可能性はあると言える。

前節で見たように、祖本との接点は、(高・6・2)(桂・3)(群)の範囲内に想定されるが、本節で見たごとく(桂)本が祖本に近い可能性があるので、ここでは(高・6・2)(桂)(3)(群)の交点辺りに祖本の接点があるとして、系統図を想定すれば、左のようになる。なお、ここでは異文の多寡を縦線の長さに置き換えて諸本相互の関係がわかりやすいようにした。



四

以上の結果、『紫禁和歌草』の各諸本を、従来言われている三分類に基づいて考えれば、一類本が祖本に近い本文であり、三類本は一類本から派生した末流本文として扱うことができる。二類本は今回(3)本の一本しか扱っていないのでその系統的位位置について細かい言及は避けておきたいが、二類本の元になった本は、これも一類本であったと推定することができる。

未調査の諸本も多く、論にいくらか不備の点も見られると思うが、今後調査を続けていくことで補っていききたいと思う。

注1 先行研究としては、

- ・和田英松氏『皇室御撰之研究』(一九三三年四月 明治書院)
- ・安田章生氏執筆『群書解題』十和歌部(四)和559(一九六〇年三月 続群書類従完成会)
- ・『和歌文学大辞典』(監修窪田空穂氏他 編集伊藤嘉夫氏他 一九六二年一月 明治書院)
- ・山本幸一氏執筆『私家集大成 中世II』解題(和歌史研究会 一九七五年一月 明治書院)
- ・有吉保氏編『和歌文学辞典』(一九八二年五月 桜楓社)
- ・唐沢正実氏『紫禁和歌草』の伝本について(『古典論叢』第一五号 一九八五年六月)
- ・山本幸一氏執筆『和歌大辞典』(一九八六年三月 明治書院)

・大取一馬氏『新編国歌大観解題』(第七卷私家集編III 一九八八年四月 角川書店)
等が挙げられる。

2 山本幸一氏(一九七五)は、

現存諸本は、宮内庁書陵部本をはじめとして、『私家集 伝本書目』に挙げられた一七種の写本、続群書類従所収本ほか二種の板本、および校註国歌大系・列聖全集などに所収の刊本がある。諸本間の系統は、現在十分には明らかでないが、『実隆公記』の記載を信ずれば、自筆本(「紫禁抄」)が、少なくとも文明七ごろには存在していたらしい。

と書いておられる。また、異同の著しい歌として、

877

あしひきの山より月の色に出て 暮行そらはなをそかなしき

(群) あしの山引より三の色

898

あきらけきならのみやまの夜はの月 みぬ面かけもすむ心哉

(群) に出て暮行空都の夜半影も

の二首を挙げられている。また、山本氏により、

『紫禁和歌草』伝本諸本(写本のみ)で今回未調査の諸本は『私家集傳本書目』によると、

順徳院御集	一	写	彰考館(已・五)
順徳院御製	一	写	彰考館(已・一四)
紫禁和歌草	一	写	神宮(文・一二一五)
紫禁和歌草	一	写	田中
紫禁和歌集	三	写	田中
紫禁和歌草	一	写	三手泉亭文庫
紫禁和歌集	一	写	九大(秋・シ・三九)
紫禁和歌草	一	写	島原公民館(一三六・二二)
順徳院御製	江戸写	後藤重郎	松平文庫
紫禁和歌集	一	正保四写	樋口芳麻呂 西荘文庫旧蔵

(29) 104 266 355 384 405 46
 8 613 642 661 72 8 825 916
 1027 11007 1219)「(マ)」

(46)「(二行分空白)」

(88) 437 738 797 1256)「(二字分空白)」

白」

(173)「(二字分空白)」

(186)「(四字分空白)」

とそれぞれ翻刻本文に付されている。

以上のものが挙げられる。

(弘) 本と(今) 本とは、

(弘) 弘前市立弘前図書館蔵本(w九一・一四一一)

外題「順徳院御集 全」内題「順徳院御集 紫禁和歌草」

一冊

四〇二首 奥書なし 合点なし

一面十行 和歌一首一行書き 歌題行頭(和歌の上)詞

書き和歌と同位 国文学研究資料館マイクロフィルム

番号 二七二五八―三による。

*三五七番―一〇三六番まで欠落しており、また、最終歌

が一〇八四番、一〇八五番詞書き「同十三夜會」までと

なっている。

(今) 賀茂別雷神社三手文庫蔵本 今井文庫(歌/申/二四

五) 寛文六年

外題内題「順徳院御集 紫禁和歌草」 一冊

一二七九首 合点あり

奥書「寛文六年丙午 年正月日 中野太良左衛門板行」

あり

一面十行 和歌一首一行書き 歌題・詞書きおよそ三字

下がり

国文学研究資料館マイクロフィルム番号 三九一〇

五一三による。

(おにつか あきら・北海道大学大学院博士課程)

右記のような本であり、(今)本について異文総数一四七(含む独自異文二二)のうち(内)本と共通異文にならない異文は四箇所だけであった。また、(内)本の独自異文(六七・一〇八・二三四・四二一・九一六番歌の五首)と同じ異文箇所があることから近い関係であると判断した。同様に(弘)本も(内)本独自異文と(六七・一〇八・二三四番歌)で共通であった。異文総数八一のうち三三箇所の独自異文が見られる。(内)本を含まない共通異文は二箇所だけである。不完全な本ではあるが(内)本に近い本ではあると判断できる。しかし、独自異文数を考えると、(内)本をさらに変化させた本であると推測できる。

5

諸本の系統関係、近似関係を論ずるにあたり、左記の宮澤俊雅氏の論文に示された方法に従った。

- ・「倭名類聚抄諸本の系統推定——十巻本巻三〇六を中心に——」
北海道大学文学部人文科学論集一八号 一九八二年三月
- ・「源順集諸本考」 北海道大学国語国文研究八八号 一九九一年三月

- ・「伊勢物語百廿五段本諸本の親疎関係」 北海道大学文学研究科紀要一〇六 二〇〇二年二月